

Title	識名章喜教授履歴・研究業績
Sub Title	Biographical resume & list of publication of Professor Akiyoshi Shikina
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.1 (2021. 12) ,p.i- xiii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	識名章喜教授退任記念論文集
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210001--005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210001--005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 識名章喜教授 履歴・研究業績



## 略歴

2021年10月09日

昭和31（1956）年10月20日 東京都台東区浅草田中町（現：日本堤2丁目）にて、父朝茂、母マサ子の長男として生まれる。余談ながら、父は戦争末期在学していた旧制桐生高校（現群馬大学）を抜け出し、無謀にも鹿児島から沖縄に渡航、祖父母の本土疎開を図るも、沖縄戦に遭遇、米軍の捕虜となって戦後に東京に戻った。母は熊本へ疎開する途上の本土連絡船が、米潜水艦の魚雷攻撃を受けるも九死に一生を得、無事疎開を果たした（ちなみに母の長兄も硫黄島の戦闘で生き残ったと言われる）。つまりこの二人が戦争を生き延びた強運により私が生まれたことになる。父はアメリカ進駐軍の基地職員として最後は定年まで横田基地に勤務したが、台東区の実家（この小さな家も東京大空襲で焼け残った）は戦前より祖母清子が経営していた労務者相手の泡盛屋「時雨」（那覇市の識名酒造は本家、東京の店の経緯については、大本幸子『泡盛百年古酒の夢』、東京：河出書房新社、131頁に詳しい）だった。

1963年4月 台東区立田中小学校（現在廃校）入学。

1969年4月 私立開成中学校入学。

1975年3月 私立開成高等学校卒業。

1975年4月 東京大学教養学部文科三類に入学（駒場での2年間ドイツ語を岸谷徹子、杉浦博、内垣啓一、恒川隆男、藤本淳雄、関楠生、少人数ゼミで小堀桂一郎、吉島茂の諸氏に習う。ドイツ科の演習で神品芳夫氏の薫陶も受ける）。

1977年4月 東京大学文学部ドイツ文学科に進学（当時の教授陣は、生野幸吉教授、濱川祥枝教授、柴田翔助教授、Thomas Beckermann講師、松浦純助手、檜山哲彦助手）。

1979年3月 東京大学文学部ドイツ文学科卒業〔卒論『E.T.A.ホフマン『くみ割り人形と鼠の王様』論—メールヒェン分析の試み』（指導教官は柴田翔氏）で学士号取得〕。

1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻修

士課程に進学（この年度より、定年退職された生野幸吉氏と入れ替わりで浅井健二郎助教授が着任）。

1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻修士課程修了〔修論『解き明かしえぬ謎・「メールヒェン」—E・T・A・ホフマン『蚤の親方』をめぐって—』（指導教官は柴田翔氏）で修士号取得〕。

1983年4月 慶應義塾大学商学部助手（ドイツ語）（公募による採用だったが、当時としては珍しく、ドイツ語の筆記試験を課されたうえ、二度に及ぶ面接があった。着任当時のドイツ語部門の同僚には、近藤逸子教授、荒井秀直教授、稲田拓教授、森田茂教授、菊池雅子教授、関口一郎助教授、大畑純一助手がいた）。

1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻博士課程単位取得退学（現在では珍しいケースであるが、採用決定時博士課程の単位を若干残していたため、慶應義塾の助手の身分のまま、単位取得完了まで1年だけ東京大学大学院博士課程に学籍を置いていた）。

1985年7月 D A A D（ドイツ学術交流会）奨学生としてフライブルクのゲーテ・インスティテュートでドイツ語の講習を2か月受けたのち留学先のバンベルク大学へ。

～1987年9月（旧）西ドイツ、バンベルク大学ドイツ文学科 Wulf Segebrecht 教授に師事。

1990年4月 慶應義塾大学商学部助教授。

1991年～1993年 日本独文学会蓼科文化ゼミナール実行委員（委員長は商学部の同僚だった菊池雅子教授）。

2000年4月 慶應義塾大学商学部教授。

2001年6月～2007年6月 ドイツ語学文学振興会理事。

2003年10月～2005年9月 商学部学習指導主任。

2008年3月 塾派遣留学により

～2009年3月 ドレスデン工大ドイツ文学科に訪問研究員として滞在。

2014年4月 慶應義塾大学文学部教授（独文学専攻）に異動（当時の独文学専攻の同僚は和泉雅人教授を筆頭に、中山豊教授、斎藤太郎教授、香田芳樹教授、平田栄一郎教授、桑川麻里生教授、川島建太郎准教授、Markus Joch 訪問准教授の面々であった）。

2015年4月 慶應義塾大学文学研究科委員。  
2020年5月～ ドイツ語学文学振興会評議員  
2022年3月 定年退職予定。

## 教歴

1992年11月／12月 茨城大学人文学部ドイツ文学科非常勤講師(集中講義)  
1997年4月～1998年3月 慶應義塾大学文学部独文専攻兼担講師  
1999年4月～2000年3月 慶應義塾大学文学部独文専攻兼担講師  
1999年4月～2008年3月 東京大学教養学部非常勤講師  
2001年9月 東京大学文学部ドイツ文学科非常勤講師(集中講義)  
2004年4月～2006年3月 慶應義塾大学文学研究科独文専攻兼担講師  
2006年4月～2011年9月 放送大学客員教授  
2010年4月～2021年3月 東京大学教養学部非常勤講師  
2013年9月～2014年3月 慶應義塾大学文学部独文専攻兼担講師

## 研究業績

(2021年10月現在)

### 〔論文〕

1. 「《アトランティス》の行方—E・T・A・ホフマンのメルヘンについて—」、東大独文研究室『詩・言語』第19号、1983年、1-24頁。
2. 「風景という名の呪文—E・T・A・ホフマンの自然描写—」、『慶應義塾大学商学部日吉論文集』第34号、1984年、1-32頁。
3. *Die E.T.A.Hoffmann-Rezeption in Japan seit 1970*. In: *Mitteilungen der E.T.A.Hoffmann-Gesellschaft*, 32. Heft, 1986, S.100-105.
4. 「バンベルク時代のE・T・A・ホフマンとその周辺 (I)—ホフマン伝説の

- 克服と作家ホフマンの誕生をめぐる一」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第8号、1989年、71-96頁。
5. 「バンベルク時代のE・T・A・ホフマンとその周辺（Ⅱ）—ホフマン伝説の克服と作家ホフマンの誕生をめぐる一」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第9号、1989年、83-110頁。
  6. 「技術時代の叙事詩—Bernhard Kellermannの『トンネル』について—」、日本独文学会編『ドイツ文学』第83号、1989年、75-84頁。
  7. 「技術の未来が語られるとき、または映像と言葉の葛藤—ラング／フォン・ハルボウの『メトロポリス』について—」、『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No. 6、1990年、24-52頁。
  8. 「ドイツ語圏における《文学と技術》—問題設定のための覚書—」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第13号、1991年、78-108頁。
  9. *Schrift und Bild — Literarische Zukunftsentwürfe am Beispiel von „Metropolis“ (Fritz Lang / Thea von Harbou)* In: *Deutschlandstudien international* 2, München 1992, S.81-103.
  10. 「未来の女性像、または前ファシズム期に夢見られた進歩的完全自動化社会—リ・トッコ『自動化時代』（1931年）について」、東京大学文学部平成3年度文部省科研費補助金（総合研究A）研究成果報告書『ドイツ近代における女性論の展開と文学作品に現れる女性像の変遷』、1992年、161-180頁。
  11. 「『かつてあった未来』から現在へ—ドイツ語圏SF前史を検証する」、『ユリイカ』1993年12月号、151-157頁。
  12. 「英雄としての技術者—Reinhold Eichackerの科学技術小説『黄金をめぐる闘争』を読む—」、日本独文学会編『ドイツ文学』第94号、1995年、43-52頁。
  13. *Comics und Literatur in Japan – eine Symbiose ?* In: „Blickwinkel Kulturelle Optik und interkulturelle Gegenstandskonstitution Akten des III Internationalen Kongresses der Gesellschaft für Interkulturelle Germanistik Düsseldorf 1994. Hrsg von Alois Wierlacher und Georg Stötzel“, München 1996, S.861-873.
  14. 「〈血と土〉に歪められた未来—ハンス・ハイク『ドイツ人のいないドイツ』（1929年）—」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第24号、1997年、14-52頁。
  15. 「フリードリヒシュタットの見霊者E. T. A. ホフマン—ロマン派はベルリ

- ンを発見したのか?—」、日本独文学会編『ドイツ文学』第101号、1998年、4-14頁。
16. 「啓蒙宣伝省のSF—ヴィルフリート・バーデの『グローリア—」、『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第27号、1998年、86-108頁。
  17. 「E・T・A・ホフマンにおける具象性の諸問題—漫画 *avant la lettre* —」、慶應義塾大学法学部『教養論叢 深田甫先生退職記念特集号』第111号、2000年、125-151頁。
  18. 「ユートピアを覆う視えない=電波—ヴァイマル期の三つの未来都市」、和泉雅人編『メディアの前衛 人間学のメディア』文部科学省科学研究費助成基盤研究(B)研究成果報告集、2005年、233-247頁。
  19. 「ドイツ語圏SF史概説—「国家小説」から〈ペリー・ローダン〉まで—」、岩波書店『文学』第8巻・第4号、2007年7・8月号、80-93頁。
  20. 「『愛』を語ることを忘れたドイツ人—ドイツ『恋愛』文学史の試み—」、『慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集』、2007年、165-185頁。
  21. *Ist „deutsche“ Science Fiction ein geeigneter Begriff? — Zum Verständnis der kulturellen Besonderheit —*、『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第46号、2010年、23-44頁。
  22. 「ドレスデンに〈温泉〉はあったのか?—E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について—」、『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第47号「小林邦夫教授退職記念号」、2011年、99-133頁。
  23. 「入浴観の違いから生じる誤解—E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について—」、『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第48号「伊藤行雄教授退職記念号」、2011年、91-129頁。
  24. 「ドイツの「中世ロック」について」、『藝文研究』No.118、慶應義塾大学藝文学会、2020年、(131-142)頁。
  25. (解説)「幻の訳書の復刻によせて—ケラーマンの『トンネル』について」、バルンハルト・ケラーマン『トンネル』、秦豊吉訳、東京：国書刊行会、2020年、498-517頁。
  26. 「<sup>おいはぎ</sup>「野盗の城」と「アッシャー家の崩壊」—H.クラウレンとE.A.ポーをつないだ翻訳について—」、『藝文研究』No.119-1「巽孝之教授退任記念論文集」、慶應義塾大学藝文学会、2021年、121-138頁。

## 〔共著書〕

1. (共著) Josef Fürnkäs/ Peter Richter/ Ralf Schnell/ Shigeru Yoshijima(Hrsg.): „Das Verstehen von Hören und Sehen. Aspekte der Medienästhetik“, Akiyoshi Shikina, *E.T.A.Hoffmann – eine Verführung. Über Andrej Tarkovskij's Szenario Hoffmanniana oder die Unverfilmbarkeit von E.T.A.Hoffmanns Leben und Werk.* (S.167- 179) Bielefeld: Aisthesis Verlag 1993.
2. (共著) 坂上貴之・巽孝之・宮坂敬造・坂本光編著『ユートピアの期限』、識名章喜「第8章 ナチズムを培養したドイツ・ユートピア小説」(173 - 193 頁) 執筆担当、東京：慶應義塾大学出版会、2002年。
3. (共著) 慶應義塾教養研究センター編『生命の教養学へ 科学・感性・歴史』、識名章喜「ナチズムの身体—優生学のユートピア?」(164–198 頁)、東京：慶應義塾大学出版会、2005年。
4. (共著) Nicola Glaubitz, Andreas Käuser und Hyunseon Lee (Hrsg.): „Akira Kurosawa und seine Zeit“, Akiyoshi Shikina, *Statik und Dynamik in Kriegsschlachten bei Akira Kurosawa.* (S.51–62) Bielefeld : transcript Verlag 2005.
5. (共著) 巽孝之・荻野安奈編『人造美女は可能か?』、識名章喜「オリンピアとマリアーE・T・A・ホフマンの『砂男』とフリッツ・ラングの『メトロポリス』」(228–257 頁)、東京：慶應義塾大学出版会、2006年。
6. (共著) 新島進編『ジュール・ヴェルヌとフィクションの冒険者たち』、識名章喜「〈ドイツのヴェルヌ〉と呼ばれたくなかった男—ヴェルヌとラスヴィッツ—」(145–163 頁)、東京：水声社、2021年。
7. (共著) 安形麻里編『2020年度 極東証券寄付講座 文献学の世界 書物に描き出された時／時の中の書物』、識名章喜「書物のなかの時間—ドイツ語圏の〈未来小説〉について—」(71–81 頁)、慶應義塾大学文学部、2021年。

## 〔学会発表・講演〕

1. 「E.T.A. ホフマンの全体像を求めて—新しいホフマン伝と変貌するホフマン像の現在—」、1988年度日本独文学会秋季研究発表会（於 熊本大学）、シン

- ポジウム「E. T. A. ホフマンを定位する」にて口頭発表、1988年10月15日。
2. „Schrift und Bild – Literarische Zukunftsentwürfe am Beispiel von ‚Metropolis‘ (Fritz Lang / Thea von Harbou)“、1990年度ドイツ学会国際シンポジウム（於 高山）にて口頭発表、1990年9月4日。
  3. „Comics und Literatur in Japan – eine Symbiose?“、1994年第3回 Gesellschaft für Interkulturelle Germanistik 国際大会（於 Universität Düsseldorf）にて口頭発表、1994年7月22日。
  4. „Inszenierte Schlacht – Statik und Dynamik der Kriegsszenen bei Akira Kurosawa“、2003年ジューゲン大学メディア美学研究所主催国際シンポジウム „Akira Kurosawa und seine Zeit“（於 Universität Siegen）にて口頭発表、2003年11月20日。
  5. 「ドイツのSFって、今どうなってんの？」（嶋田洋一、五十嵐洋両氏とのセッションに参加）、2007年第65回世界SF大会 / 第46回日本SF大会（於 パシフィコ横浜）、2007年9月1日。
  6. 「ドイツ語大学入試問題の問題点—慶應義塾大学の場合—」、2015年度日本独文学会春季研究発表会（於 武蔵大学）ドイツ語教育部会主催企画にて講演、2015年5月30日。
  7. 慶應義塾大学海外副指導教授招聘プロジェクトによる講演会シンポジウム「すっきりしない起源—サイエンス・フィクションの系譜学のために—」の企画・司会担当（ヴィーン大学教授 Roland Innerhofer 教授の講演、パネリストに文学部教授巽孝之、経済学部教授新島進氏を迎えて開催）、2017年4月20日。
  8. 「ヴェルヌとクルト・ラスヴィッツ」、日本ジュール・ヴェルヌ研究会主催、慶應義塾大学教養研究センター後援『ジュール・ヴェルヌ再発見—作家と大衆作家』（於 慶應義塾大学日吉キャンパス、来往舎シンポジウムスペース）にて口頭発表、2017年10月22日。
  9. 「ドイツの「中世ロック」について」、2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用—5カ国篇」にパネリストとして参加、口頭発表、2019年12月13日。

## 〔研究プロジェクト〕

東京大学文学部、平成3（1991）年度文部科学省研究費補助金（総合研究A）「ドイツ近代における女性論の展開と文学作品に現われる女性像の変遷」に参加。  
平成5（1993）年度文部省科学研究費による奨励研究（A）「ドイツ近代文学にいける未来小説の系譜—文学的想像力のとらえた科学技術の未来像—」  
慶應義塾大学文学部、平成14～16（2002～2004）年度文部科学省研究費補助金「二〇世紀初頭の日本におけるメディア革命の比較文化理論的研究」に参加。

## 〔翻訳〕

1. ヘルムート・キューン / ゲオルク・クヴァンダー 共編（岩下真好ほかと共訳）『グスタフ・マーラー —その人と芸術、そして時代—』（第四章および第五章のうち第五、六、七交響曲の個所を担当）、東京：泰流社、1989年。
2. （単独）R・ザフランスキー 『E・T・A・ホフマン ある懐疑的な夢想家の生涯』、東京：法政大学出版局、1994年。
3. ノルベルト・ボルツ（足立典子と共訳）『ゲーテンベルク銀河系の終焉—新しいコミュニケーションのすがた—』（序文、第I、II、V章を担当）、東京：法政大学出版局、1999年。
4. （単独）ヨースト・ヘルマン 『理想郷としての第三帝国 ドイツ・ユートピア思想と大衆文化』、東京：柏書房、2002年。
5. マルクス・ハマースシュミット 「<sup>あらしばん</sup>暴風監視官」、『SFマガジン 異境からの物語—非英語圏SF特集』第44巻第10号（570）、2003年10月号、42-52頁。
6. フランツ・ロッテンシュタイナー 「情報の海のロビンソン」、『SFマガジン スタニスワフ・レム特集』第45巻第1号（573）、2004年1月号、63-70頁。
7. アルブレヒト・レーマン（大淵知直と共訳）『森のフォークロア ドイツ人の自然観と森林文化』（第1、2、5、9、10章および「謝辞」・解説を担当）、東京：法政大学出版局、2005年。
8. （単独）エーバーハルト・シュタインドルフ 『シュターツカペレ・ドレスデン—奏でられる楽団史』、東京：慶應義塾大学出版会、2009年。

9. ヘルムート・W・モンマース「ハーベムス・パーバム（新教皇万歳）」、高野史緒編『21世紀東欧 SF・ファンタスチカ傑作集 時間は誰も待ってくれない』、東京：東京創元社、2011年、17-37頁。
10. (単独・解説・年譜) フケー『水の精 (ウンディーネ)』、東京：光文社 (光文社古典新訳文庫)、2016年。
11. アルブレヒト・レーマン (大淵知直と共訳)「神秘化された森と環境保護運動—ドイツの事例より」、岩本通弥 [編著]『方法としての〈語り〉 民俗学をこえて』、京都：ミネルヴァ書房、2020年、121-145頁。

### 〔その他〕

1. コラム「レコ芸図書館 音楽と文学 [E・T・A・ホフマンの音楽作品]」、『レコード芸術』、1984年10月号、336頁。
2. 書評「Wolfgang Beutin(Hrsg.): Deutsche Literaturgeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. Dritte überarbeitete Auflage. Mit 400 Abbildungen.」、日本独文学会編『ドイツ文学』第86号、1991年、173-175頁。
3. エッセイ「〈So war die Zukunft〉「かつてあった未来」へのタイムトラベル—ドイツ語圏の技術未来小説について—」、『MD 基礎ドイツ語』3月号 (第11号)、1993年、62-63頁。
4. エッセイ「特集・私が読んだ最近のこの一冊 アーノルド・クラミッシュ著『暗号名グリフィン—第二次大戦の最も偉大なスパイ—』 ポール・アードマン著『暗号名スイス・アカウント]」、『三色旗』No.552、1994年3月号、16-17頁。
5. エッセイ「夏は語学の勉強に限る!?!」、『三色旗』No.580、1996年7月号、1頁。
6. (批評欄) 海外盤試聴記「E.T.A. ホフマン：歌劇《ウンディーネ》ヘルマン・デヒヤント指揮バンベルク青少年 O, バンベルク・オラトリオ cho, ヘルマン・バック (Br) / ハイトルーン・プレシュ (S) 他 [独バイヤー① BR100 256-58 (3枚組)]」、『レコード芸術』、1996年11月号、277頁。
7. (批評欄) 海外盤試聴記「フンパーディンク：歌劇《王の子ら》ファビオ・ルイージ指揮ミュンヘン放送 O, バイエルン放送 cho, ミュンヘン少年 cho, モーザー (T) シェレンベルガー (S) ヘンシェル (Br) シュミーゲ (A) 他 [独

- カーリヒ⑩ CAL50 968-70 (3枚組)]、『レコード芸術』、1996年12月号、277頁。
8. 「アンケート結果の特徴について (ドイツ語) 可不可先生、辞書について語る」、『生協ニュース教職員版 せいきょう』、1997年2月1日第79号、7頁。
  9. エッセイ「Feministin になりきれなかったあなたへ」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第30号「菊池雅子教授 退職記念号」、2000年、(35)–(37)頁。
  10. エッセイ「ドイツ SF」、日本 SF 作家クラブ編『SF 入門』、東京：早川書房、2001年、14–17頁。
  11. (座談会の司会として)「追悼座談会—関口一郎さんとドイツ語教育— (出席者：大谷弘道、中山 純、斎藤太郎、三瓶慎一、平高史也 s)」、『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第35号「関口一郎教授 追悼号」、2003年、211–225頁。
  12. エッセイ「ドイツ SF 最新事情 ローダンの呪縛を脱した三作家」、『SF マガジン 異境からの物語—非英語圏 SF 特集』第44巻第10号 (570)、2003年10月号、53–56頁。
  13. エッセイ〈巻頭言〉「危険な恋愛指南書としての『たくらみと恋』」、『三色旗』No.679、2004年10月号、1頁。
  14. 〈座談会〉「ドイツの横顔とドイツ人の魅力 米良美一／識名章喜／小尾晋之介 / フィリップ・オステン」、『三田評論 特集 ドイツ再発見』No.1078、2005年4月号、12–31頁。
  15. エッセイ「ドイツ人の愛?」、D A A D 友の会編『Echo 21 友の会創立 20 周年記念号』、2005年10月、38–40頁。
  16. (項目執筆)「日吉紀要刊行委員会」、慶應義塾史事典編集委員会 (編)『慶應義塾史事典 (慶應義塾 150 年史資料集 別巻 1)』、東京：慶應義塾出版会、2008年、280頁。
  17. エッセイ〈巻頭言〉「雑感—旧東独に暮らして」、『三色旗』No.739、2009年10月号、1頁。
  18. 「E.T.A. ホフマンに魅せられた音楽家たち」、新国立劇場 2013/2014 シーズン『ジャック・オフエンバック ホフマン物語』、2013年11月、31–34頁。
  19. 「解説」、ホフマン (大島かおり訳)『くるみ割り人形とねずみの王さま / プ

- ランピラ王女』、東京：光文社（光文社古典新訳文庫）、2015年、433–461頁。
20. 〈座談会〉「世界 SF の透視図」（司会：巽孝之／沼野充義、立原透耶、新島 進、識名章喜）、『三田文學』春季号（第98巻 第137号）、2019年、102–125頁。
  21. 「シューマンとジャン・パウル」、シューマン『ピアノ曲集Ⅰ』、東京：音楽之友社、2021年、3頁。
  22. 〈巻頭随筆 丘の上〉「ドイツ映画『水を抱く女』雑感」、『三田評論』No.1255、2021年5月号、5–7頁。
  23. 「シューマンとE.T.A.ホフマン」、シューマン『ピアノ曲集Ⅱ』、東京：音楽之友社、2021年、2–3頁。
  24. 「科学技術の国ドイツのSF」、『塾』No.312、2021年秋、5頁。

### 〔教科書〕

1. （共編）大谷弘道・井戸田総一郎・岩下真好・大畑純一・識名章喜編『新編初歩 ドイツ語 改訂三版』、東京：慶應通信、1993年。
2. （編注）エーベルト／クバチェック／識名章喜『辛口読本「島国オーストリア」—エピソードでつづる日墺文化比較—』、東京：白水社、1993年。
3. （編注）アンドレアス・エシュバハ『ハロウィン』、東京：白水社、2005年。
4. （共著）鍛治哲郎・識名章喜『ドイツ語入門Ⅰ（,06）』、東京：放送大学教育振興会、2006年。
5. （共著）鍛治哲郎・識名章喜『ドイツ語入門Ⅱ（,06）』、東京：放送大学教育振興会、2006年。
6. （共著）Gabriele Richter／山田史子／識名章喜『スケッチで学ぶドイツ語』、東京：同学社、2006年。
7. （単著）識名章喜『ダンケ・シェーン、ドレスデン！』、東京：白水社、2012年。
8. （共著）識名章喜・鈴木直樹・中山純・森泉・山口祐子・横山由広『新・ドイツ語 第二部』、東京：慶應義塾大学通信教育部、2016年（『ドイツ語 第二部』、2020年）。

